

はしがき

インド太平洋は、巨大な国力を有する米中二大国が角逐を繰り広げる競争の中心地である。このことから、この地域を米中の「二極構造」としてとらえる向きもある。しかし、本書ではこの「二極構造」の視座を用いずに、インド太平洋の国際関係の分析を進めたい。それは、両大国以外の多様な国々の動向とその影響をも考慮に入れずして、この地域の国際関係を十分に理解することはできないと考えるためである。実際、現在のインド太平洋においては、米中両国のどちらかが相手を凌駕し、自らの立場を高めるのかという大国間対立の問題に限らず、米中以外の地域諸国もまた、いかに自らの自律性や影響力を高め、その安全保障を守るのか、それぞれの目標を追求しながら、地域の競争に参画し、そのあり方を規定している。本書では、インド太平洋において米中両大国に加え、さらに他の多くの地域諸国の影響力や戦略が複雑に交錯する状況を「競争の多元化」ととらえて、その実態や含意を分析する。

もちろん、この地域において「競争の多元化」の趨勢が今後も定着する保証はない。本書執筆にあたって意見交換をしたある東南アジア人研究者は、米中両国がいわば「マグネット」のように他の地域諸国を引きつけ、地域が二つの陣営にある程度分断されていくシナリオも否定しきれないと示唆した。本書では、こうした「陣営」が形成される可能性や、それをうかがわせる兆候が存在する点についても注意を払っている。仮に今後米中の二極構造に向けて「陣営化」が進み、両大国の戦略に追従せよとの圧力が高まれば、おそらくその他の地域諸国の選択肢、影響力、自律性の余地は大きく狭まることになるだろう。本書のタイトルを『岐路に立つインド太平洋』とした理由は、「競争の多元化」という趨勢に着眼しつつも、状況次第では「陣営化」に進む可能性をも見据えているためである。

本書は、以下の構成でインド太平洋地域の「競争の多元化」を分析し、今後の展開を占ううえで重要な論点や諸概念を提示する。序論（執筆：石原雄介）では、現在のインド太平洋地域において米中二極「陣営」に、完全に分断が進んではない複雑な構図を「競争の多元化」と概念化し、詳述する。本章では、第1章以降で展開される各国個別の動向を取り扱ううえで基礎となる、研究上の問いや分析の視座を提示する。

続いて、第1章（執筆：前田祐司）では、インド太平洋地域の競争の多元化を左右する重要な変数である、現在の米国が掲げる「アメリカ・ファースト」を分析する。本章では、「アメリカ・ファースト」的な外交政策の重要な特徴として、①地理的範囲の限定、②時間軸の短縮、そして③相対利得の追求に導かれた独特の国益観がある点を浮き彫りにする。またアメリカ・ファースト的な考え方が力を得た背景として、特に2000年代から2010年代にかけて、中国の台頭も作用して米国内で相対的衰退の認識が広がったことを指摘する。

第2章（執筆：山口信治）では、中国が近年進める「グローバルサウス」諸国との関係強化を分析する。本章では、中国の意図が米国の覇権を「掘り崩す」ことにあり、その手段として「グローバルサウス」諸国との関係発展のためにさまざまな政策的手段を打ち出している点や、中国が抱える制約を明らかにする。こうした中国の外交は国際関係の陣営化を促す一方で、グローバルサウス諸国の外交の多元化をも加速させているという意味で、二面的な性格を有している。

第3章（執筆：石原雄介）では、日本が積極的に推進するミニラテラル枠組みの一つである日米豪比「スクワッド」の発展要因を分析する。ここでは、「スクワッド」推進の変数として往々に強調される米国の主導性のみならず、日本、フィリピン、豪州それぞれの戦略およびこの3カ国の間の「同志性」の具体化・拡大が、もう一つの重要な変数である点を明らかにし、これを多元化の具体例と位置付ける。

第4章（執筆：石田智範）では、韓国のインド太平洋政策を取り扱う。本章では、とりわけ韓国のアイデンティティをミドルパワー（中堅国）と概念化しつつ、その特有の地域政策の動向を詳述する。ここでは、韓国のインド太平洋政策が依然として、対米関係と対中関係の両立を図るという、戦略的な目標の枠内で展開されていることや、多元化する地域のプレーヤーとして韓国が抱える悩みについて分析の光が当てられる。

第5章（執筆：佐竹知彦）では、豪州が近年取り組む米英豪「AUKUS」および経済安全保障政策を事例に、「競争の多元化」に対応する豪州の取り組みとその課題を分析する。豪州は米豪同盟とAUKUSを維持しつつ、日本を含むパートナーとの協力を拡充し、深化する対米・対中依存の中で戦略的余力を確保すべく腐心している。

第6章（執筆：庄司智孝）では、東南アジア諸国のヘッジ戦略を分析する。冷戦後の東南アジア諸国は多国間協力枠組みに域外主要国を取り込み、ASEAN中心性を確立し、域外諸国との関係を、ASEANという制度を通じてヘッジする政策を進めた。しかし、本章では、米中対立の激化でこうした制度のヘッジの機能が低下した結果、東南アジア各国はそれぞれ個別の、異なるヘッジを展開し、その態様が多元化した点を明らかにする。

第7章（執筆：伊豆山真理）では、インドの多角的連携を分析する。インドは多角的連携をグローバルな次元とインド太平洋地域の次元の双方で進めているが、それらの趣は大きく異なるものである。グローバルな文脈において、インドは明確に「多極化」の進展を強調し、中国を重要な構成国とする枠組みに参加する姿勢をみせる。一方、地域の文脈においてはより中国に対抗する意図が目立つ場面が多い。本章では、こうした分析を通じて、「競争の多元化」の中で、自らの立ち位置を模索する等身大のインドを明らかにする。

本書は、2024年から2025年にかけて防衛研究所が主催した研究プロジェクトの成果として実現した。その間、所内外の多数の研究者や実務者より貴重な意見や建設的批判をいただいた。また、株式会社Solafuneより、本書で使用している日米有識者のオピニオン調査を担っていただいた。防衛研究所の菊地茂雄政策研究部長にはプロジェクト全般に指導をいただき、また同所の川村幸城主任研究官、相田守輝所員、山口章浩研究員、辻田友規研究員には献身的に編集作業を進めていただいた。さらに、今回の執筆チームは主に防衛研究所所属の研究者で構成されているが、青山学院大学の佐竹知彦准教授にもご多忙の中、執筆者としてご参加いただいた。皆様に御礼申し上げます。

本書の内容はそれぞれの執筆者による研究者としての個人的見解である。プロジェクトを主宰した防衛研究所の見解を代表するものではないことをお断りしておきたい。

2026年（令和8年）3月

執筆者・編集部を代表して
防衛研究所政策研究部 防衛政策研究室 主任研究官 石原 雄介